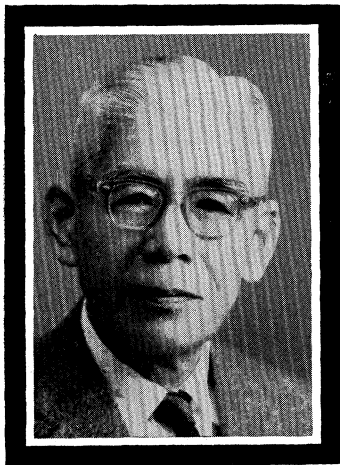


## 故 名 譽 員 第 33 代 会 長 田 中 豊 先 生 を し の ぶ



田中豊先生が、多年わが土木工学界の重鎮として御活躍をされ輝かしい御功績を残されたことは周知のことですが、昭和39年8月27日享年76才で逝去されました。誠に痛恨哀惜の極みであります。

先生は明治21年1月29日御誕生、旧第七高等学校を経て大正2年東京帝国大学工科大学土木工学科を御卒業鉄道院技術部に勤務されました。大正9年鉄道事業研究のため満2カ年の間英国、独逸および米国に留学され、鉄道力学特に高速度運転に関する事項を研究され大正11年11月帰朝されました。関東大震災後の首都の復興に際しては帝都復興院技師をも兼任され、初代橋梁課長として隅田川にかかる永代橋、清洲橋など東京の象徴として一般世人にもなじみの深い数々の名橋を生み出されました。特に永代橋はタイド・アーチとカンティレバー橋とを組合せたもので先生の独自の構想になるものであり、使用鋼材としてもデューコール鋼を橋梁に利用した最初の例でもあります。今日わが国の橋梁およびその他の基礎工事にしばしば圧搾空気潜函工法が利用されますが、これも先生が正子重三氏とともに永代橋々脚・橋台工事に試みてその有用性を実証したことがあづかって力あったものと信ぜられます。御茶ノ水両国間の高架鉄道の新設に当り架せられた両国鉄道橋も先生の英断によって選定された橋梁型式で、この種鉄道橋としては日本最初のものであります。また同路線が昭和通りと立体交叉する地点に設けられ

た支間44米余のプレート・ガダー橋は当時としては世界的にも極めて大胆なる設計で、その後の設計方向のさきがけをなしたものであり、さらに同じく松住町架道橋も先生多年に亘る御研究の結実したもので、鉄道省大臣官房研究所第四課長在職時の業績であります。また先般の新潟地方の地震に被害を最小限度にとどめ得た万代橋も先生の御指導によって設計されたものであります。

大正14年6月に東京帝国大学の兼任教授として先生は土木工学第三講座(橋梁工学)を担当、昭和9年3月には東京帝国大学教授に専任となられ、昭和23年3月定年を以て退官されるまで東京大学工学部に於て24年間にわたり学術の研究と学生の指導に尽瘁されましたが、研究者の養成には特に意を注がれました。厳しいなかにも慈愛のこもった先生の御指導を頂いた門下生は今日日本各地で土木工学界の第一線に立っているわけであります。広島に原爆がおとされた直後、被爆地区の構造物の調査を先生が総括されましたが、その報告書は米国科学者の注目をあびたのであります。

昭和23年11月東京大学名誉教授の称号を受けられました。東京大学退官後も先生の御指導を仰ぐ者は多かったのであります。戦後架せられた大橋梁である西海橋、若戸大橋、広島市の住吉橋並びに旭橋伊豆の千蔵橋および東海道新幹線の数々の鉄道橋などの架橋にはさらに横河橋梁製作所相談役としての御立場もあり、先生の卓抜した御学識と豊かな御経験とが見事に生かされたのであります。

顧えりみますれば先生が鉄道院に奉職された頃は、丁度鉄道橋の設計等について外国の模倣を脱し、ようやく日本独自の姿を産みだそうとする時期に当たっていたわけであります。このとき先生はわが国橋梁技術の向上のため御研鑽を重ね、自らその設計を担当されると共に、近代橋梁の理論と構造に新風を吹きこみ、わが国の橋梁技術を国際的水準まで高めるのに多大の御功績がありました。昭和4年には「変断面を有する柱材の強度について」と題する論文で工学博士の学位および土木学会賞を受けられました。また昭和6年電弧溶接工法をわが国ではじめて橋梁に導入され、今日における溶接技術隆盛の端緒を開かれたのであります。

先生はまた日本学士院会員、日本学会会議々員、土木学会々長、溶接学会々長などとして学術の発展に尽力されましたが、昭和19年には学術技術の振興に尽されたをもって、紫綬褒章をうけられ、なお今回、正三位に叙され勲二等旭日重光章を授与されました。本年5月、いわゆる新二重橋の架橋工事が完了致しましたが、この工事は、旧二重橋の耐荷力に関し陛下より直接先生に御下問があったことにも由来するもので、先生の御指導の下に新橋の設計と工事が進められたのであります。二重橋完成の日、新しい橋梁で工事に関係した弟子達に「僕の一生は古い二重橋と一緒だ。生まれた頃丁度二重橋が鉄橋として架けられたのだから」と語られたのですが、その後3ヶ月をたなずして先生は不帰の客となられました。

またここ数年來、いわゆる夢のかけ橋として世界の注目を集めている本州・四国連絡橋の技術調査が土木学会に委託され、先生がその委員長として高い識見の下に精力的な調査研究を進めておられたのであります。このとき先生を失なったということはまことに痛惜の念にたえません。

ここに先生の御業績の一端を追憶し、謹んで追悼の詞と致します。

(正員 平井 敦・記)